

清田中全中参戦記 ～男子、高さへの挑戦～

札幌市立清田中学校 高橋和也

清田中と言えば、やはり女子のイメージが先行するのですが、男子もしっかりと活動していました。ただ、昨年までは女子より早い段階で負けてしまうので、応援にまわることの方が実際多かったと言えます。それでも彼らはいじけもせず、すねることもなく、「なんで女子の応援なんてしなきゃいけないんですか!？」とも言わずに、胸を張って全道大会の試合会場で声援する姿がありました。私は日頃から「人のことを応援できる人になりなさい。そういう人がやがて人から応援してもらえるのだから。」と言っていました。彼らは正にそれを実践していたと考えます。

さらに、今回の清田男子の特筆すべき点は、スタメンの最長身者が175cmという超小型チームであったことです。全中の出場権を獲得した過去の北海道代表校を全て見たわけではありませんが、これほどまでに小さなチームが勝ったのはきっと初めてでしょう。

男子の全中参戦記では女子の日陰になりながらも、いつかは自分達だつてと歯を食いしばり、大型チームに立ち向かった子ども達の活動を報告します。ともすれば、ダラダラしたり、格好ばかりつけたがりな男子中学生の中で、いかに勤勉でまじめであることをよしとしてきたかを知ってください。なお、3年連続出場した本校女子の報告とは、女子特有のきめ細かい取り組みに比べると、結構あっさりしたものになるかもしれません。しかし、これはチームへの思いの差などでは決してありません。女子よりページ数が少ないなどと、表面的なことにはこだわらないで読んで頂けると幸いです。

1. チーム作りにあたって

選手の資質には先天的に持ち合わせているものと、後天的に身につけていくものがあります。また、指導者や本人がどんなに努力しても、こればかりはどうにもならないというものも間違いなくあります。それでもバスケットボールが大好きな子ども達の夢を実現させてあげるべく、指導者は日々努力して行かねばなりません。

この代の清田男子は、始めから高さの面での期待はできませんでした。3年生までにはもう少し大きくなるだろうという淡い期待もありましたが、それでも180cm台がスタメンに入ることはないことを予感していました。

ただ、ディフェンスの感覚が大変よく、相手の間合いをつぶしたり、動きを読んでドリブルやパスをスティールする力は入学当初から抜群にありました。であれば、これを生かす他ありません。目指すは厚別北で私が最後に教えたチーム。そして、もっと言うと「高さへの挑戦」を掲げて日本一に何度も輝いた能代工業のバスケットボールです。ゴール下まで来られてしまうと、高さで押し切られてしまうので、ゴールから遠いところ

で勝負を仕掛け、ボールを持った素早く自陣に向かうプレイスタイルに打開策を見出しました。

ところが、大きな問題点がありました。それはシュート力がさほどなかったということです。つまり、せっかく奪ったボールもレイアップシュートに持って行ければ得点となりますが、少し離れたところからのジャンプショットとなると、ポロポロ簡単に落としてしまいます。それでいて小さいからオフェンスリバウンドは拾えないのです。

この悪循環を断ち切るためには、打ち出の小槌でもあればいいのですが、そんな都合の良いものはこの世の中にはありません。そこで、かつて北海道を代表するシューターとして活躍した津梅直哉コーチが選手一人一人にきめ細かい指導にあたってくれました。すぐに効果は出ませんでした。体育館の使える日は200本以上のシュートを打ち込んだことで、山崎がシューターとしての頭角を現し、ポイントゲッターだった山田もかなり安定したシュート力を身に付けました。先天的なものが指導によって開花した良い例だと私はとらえています。地道な反復練習の中で身につけられた賜物です。やはり努力は人を裏切らないのだと言えます。

なお、津梅氏には私が男子につけないときはヘッドコーチとして指揮をとってもらうことも多々ありました。救急救命士の仕事を終えて、ほとんど寝ていない状況でも、練習に駆けつけて熱い指導をしてもらったこともあります。感謝の気持ちから、彼の家の方向へ足を向けて眠ることが私はできません。

さて、シュート力に関してはある程度のメドが付いたものの、すぐに次の問題が発生しました。それは「1試合を通して豊富な運動量を保つことができない」ということです。そして、激しいディフェンスをする分、どうしてもファウルトラブルが起こり「交代して出た選手ではチーム力が落ちてしまう」ということでした。

この解決策に一役買って出てくれたのが田中孝和トレーナーです。厚別北の頃からお世話になっている彼に、「最初から最後まで脚力が落ちない体力作りをしてほしい。」という無茶なお願いをしました。彼からの返答はいつも「わかりました。」です。しかし、これは彼がイエスマンだからではなく、彼なりの見通しがあるからそう答えてくれるのです。フィジカル面での強化は彼に任じ、私はプレスディフェンスにより一層磨きをかけるべく選手達への指導にあたりました。恐らく子ども達も薄々感じているでしょうが、ボールマンにプレッシャーをかけていても「パスを出されたら、全力で追いかけてパスより早く追いついてダブルチームを作れ！」などとスーパーマンでもなければできないことまで要求していました。ただ、これは無理を承知の上で、不可能を可能にする取り組みをしていかなければ超小型チームの未来はないと考えていたからこそその「妥協なき指示」でした。できるできないが問題ではなく、あくまでも「挑戦」なのです。

体力面の課題は大分解決することができましたが、選手層を厚くすると言った点においては最後まで完璧になったとは言い切れません。しかし、藤岡がその穴を十分に埋めてくれる働きを見せてくれたと考えています。彼のオールラウンドな力によって、スタメンの

誰かに何かが起こったとしても、ベンチから飛び出してポイントガードからセンターまで何でもこなしてくれたのは大きかったです。欲を言えばあと一人、そんなプレイヤーが出てきてほしかったのですが…。

また、副顧問の作田先生には多くの練習ゲームの審判をしてもらい、日本公認の彼のジャッジによって、激しいディフェンスの中でもどこまでが許されて、どこからがファウルなのかを選手達は身を以て感じ取ることができました。その結果としてファウルトラブルによる戦力低下を最低限避けることができたと考えます。「あれだけディフェンスするから、相当ファウルも多くなるのでしょうか？」とよく質問されましたが、実際のところ、ファウルアウトした選手が出た試合はそれほど多くありません。これは選手の中にファウルへの明確な基準があったからに違いないと考えます。

このようにスタッフもチームとして指導にあたった結果、選手達の努力も重なって、全中出場という結果がついてきたのだと確信しています。

2. 諸大会を通して

前年度、何度練習試合で負け続けようとも、自分たちの勝利を信じてあきらめなかった先輩達が彼らにはいました。そんな先輩達の姿が彼らの脳裏には焼き付いていたと思います。特に、美香保体育館で行われた中体連札幌予選では、厚別中に第3ピリオドで一時20点差以上付けられながらも、最後まで粘りに粘った結果、大逆転勝利を収めた体験させてもらったのです。

だから、まじめにこつこつとあきらめずにバスケットボールに取り組む大切さを、彼らは人一倍理解していたと思います。そして、私の経験上からも言えることですが、ジュニア期においてはまじめに取り組むチームにこそ、勝利の女神が微笑むのです。一生懸命、誠実にバスケットボールをしているチームには不思議なほど、幸運が舞い込みます。そんなことを言うと、かなり運命論的で宗教がかってしまいましたが、本当にそういうことがあることは皆さんも知っておいた方がよいでしょう。

このチームにはそんな力があると感じたのは全道新人大会の時です。南大会では分の悪い厚別中があいの里東中に敗れたので対戦なし。結果として、東海大四に次いで南2位で決戦大会へと進み、予選リーグで北1位の北見北と試合しました。高さやパワーに押されて敗戦。ところが、南1位の東海大四が帯広南町に予選で敗れたことで、準決勝での対戦はなくなり、またも東海大四に次いで全道2位という成績を収めることになりました。

「まじめにやっていたらツキも味方してくれる。」口には出さなくても、チーム内の雰囲気はそれをベースに動いていました。その頃から、練習中のフットワークで自ら進んで負荷を強くしていく行動も見え始め、「やらされる練習からやる練習」への移行がスムーズにできていったと考えます。

しかし、とにかく小さい…。アップをみる限りではとても強いチームには見えません。それでも彼らが勝てる最大の原動力は「ボールへの執着心」でした。ディフェンスで頑張

ってスティールを常にねらい、ルーズボール(特に床に転がったボール)は絶対に負けないという意識が他のどのチームよりも強かったのだと思います。そして、素早い動きで相手を置き去りにして点のように孤立させ、それとは対照的に自分達は連携して線を描くようにコンビネーションを作って得点をあげました。

ただ、全く誰も攻めなくなる時間が突然訪れることがありました。どこからでもゴールを狙う集団ではなく、まるでボールが時限爆弾かのようにパスばかりする光景が見られたのです。私はこれを「こどもバスケの時間」と揶揄していましたが、シュートの自信のなさから来るのか、激しい運動に身体がついていかなくなるのか、はたまたただの甘えん坊の集団だからそうなるのか、原因はよくわかりませんでした。とにかく、この時間帯をなくすべく、バスケットボールの正しい考え方、正しい動き、正しい攻め方などを練習で徹底してレクチャーして選手がおとなになることを目指しました。

さらに、古い能代工業の文献を読んだり、ビデオ(何とVHS)を見直して、点数を取られてもいいから取り返す。1ピリオド20点以上取ることを目標にハイスピードなバスケットボールを目指すことを子ども達と確認しました。とにかくオフェンスでもディフェンスでも足を止めない。そうすれば最初はついてこれる相手も必ずバテるから、最後まで走りきって80-60のスコアで勝つのを理想としたわけです。これはかなり邪道なバスケットボールの考え方かもしれませんが、自分達の勝つ道はこれしかない！と信じて、中体連に向けて練習に取り組んでいったのです。

一抹の不安は高さとパワーへの対応です。プレスダウンはどうしてこうして…と変に考えてくるチームはそれほど怖くはありませんでした。今だからこそ言いますが、槍を持って突進してくるような野性味あふれるワイルドなチームには弱かったのが事実です。これに関しては小兵力士が大柄な相手とぶつかり合うのをイメージし、ヒットバッグを使った練習を積極的に取り入れて鍛えました。問題はこの激しい練習によって、私の肩の痛みが未だにひかないことです…。

3. 中体連札幌予選

北海道カップで北見北に敗れ、札幌春季選手権で厚別中にも敗れたウチにとっては、中体連札幌予選は決して楽観できるものではありませんでした。選手たちもまだまだ「こどもバスケ」が抜けきれない面もあり、あまりに不甲斐ない取り組みに「ふざけるな！お前らはもう帰れ！」と怒鳴りつけたところ、「気をつけ。ありがとうございました。」とあっさりあいさつされたこともありました。しかも、それは中体連札幌予選が始まる前日のことだったのです！

そんなこともあって、中体連札幌予選1日目は怒り心頭でほとんどベンチで指示を出していません。試合後のミーティングで自分達の何が悪いのか、何が足りないのかを、気づかせ、目標に向かって歯を食いしばって頑張ることを再確認しました。

そして、迎えた美香保体育館での決勝リーグ。最初の相手は厚別中でした。初戦を何と

してでも白星で飾りたいところでしたが、気合いは空回り。それでいて厚別中のパワフルなオフェンスには腰が引けるという最悪の状態。菊池が繰り返し放つスクープショットは全く入らず、万事窮しました。今思えば、彼が最もスクープショットを決めたのは山の手高校女子との練習試合で、それは6号球を使用していたからだったのです。もっと早くそのことに気づいて諭してあげなければダメだったと感じています。

結局、厚別中に負けて重苦しい雰囲気です。美香保から清田への帰路に着きました。貸切バスの中では誰も一言も発せず。同乗していた女子にとっては苦痛の時間だったのではないかと思います。清田に着いてからのミーティングでは周囲の信頼を裏切ったあまりに不甲斐ないプレイを叱り飛ばしました。先に帰した女子に言わせると「こんなところまで先生の声、聞こえるんだね。」と歩きながら話していたと言いますから、かなりの近所迷惑だったと言えます。反省しています。この時、普段はあまり感情の起伏が激しくない穏やかな芳賀でさえも、チームメイトに泣きながら「期待に応えられなくてゴメン。」と謝っていました。

しかし、その時私が見たのは「負けたことは仕方ない。まだ明日があるから頑張ろう！」「大丈夫だ。まだ終わっていない。明日こそやってやろう。」と励ます今多や市村を始めとする控え選手の姿でした。ようやくここに来て「こどもバスケット」から成熟した集団になれたと思えた瞬間が訪れました。

翌日の初戦は東海大四と。負ければこれで終わり。やっと成熟したチームもこれで歩みを止めることになるわけです。清田中の先生も校長先生を始めとして、何名かの方々が美香保体育館にわざわざ足を運んでくれました。外部コーチの津梅氏からは「アウトサイドはある程度捨てて、インサイドを固く。特にセカンドショットを許さないように、ディフェンスリバウンドを死守する。プレスは取れもしないボールを深追いしない。パスで頭を越されたら全力で戻れ！」というものでした。そして、最後に彼がいった言葉は「謙虚にバスケットをやれ！」でした。これが選手の心に響いたのだと私は考えます。彼らはこの大一番で最高のゲームを見せてくれました。津梅コーチ、田中トレーナー、作田先生、そして私のスタッフ4名が心に描いているバスケットを見事に表現してくれたのです。結果として東海に勝利。この時点で1勝1敗となり、首の皮を一枚残しました。しかも、ゴールアベレージでは確実に全道出場の切符を得られることがわかりましたので、変に点数を計算して決勝リーグ最終戦をするのではなく、とにかくその試合に勝つことに集中すればよいという状況になったのはラッキーでした。

ただ、良い試合をやった後に、心身共に疲弊して勝ちを逃すなんてことはよくあるものです。最終戦の八軒戦は絶対に負けられない。であればどうすればよいのか。「謙虚にバスケットボールをやる！」を合い言葉に、チーム一丸となりました。結果は立ち上がりから怒濤の攻防でスタートダッシュを見せることができ、最後は控え選手も全員出して有終の美を飾ることができました。東海が厚別に大勝したため、ゴールアベレージの差で2位でしたが、全道出場を男女アベックで決められた日の打ち上げは最高のものとなりました。

4. 中体連全道予選

全道予選の抽選は札幌同士が逆ヤマに入るため、東海大四とは決勝まで当たることはありません。問題はそれ以外の北見北や中標津といった高さやパワーのあるチームがどこに入るかということでした。抽選当日はウィークデーでしたので、普通に授業を教え、ようやく職員室に戻って、一つ大きな深呼吸をしてから全道大会のHPを開きました。私のくじ運の悪さには定評があり、札幌市の修学旅行JR割当の抽選会で全市96校の96番目を引いたこともあります。しかし、今回の組合せはウチにとって悪くないものでした。こんなこともあるのか…と再び、バスケットボールをまじめにやっている選手たちに近づく勝利の女神の存在を感じました。

もちろん、良いことばかりではありません。大会2日目は試合時間が男女全く同じで別会場という組み合わせになっていました。これによって、私がどちらかのベンチに入らないことを決断しなければなりません。男子はこの頃になると、主将の高橋を中心にかなり信頼できるチームになっていましたので、メンタリティーの部分も考慮して、私は女子会場へ。津梅コーチと作田先生が男子会場に行くこととしました。後は彼らの頑張りを信じるのみ。大会最終日は北斗市総合体育館1会場ですから、絶対にそこで会うことを約束して祈るような思いで男子のバスを見送りました。

試合のスコアは途中経過も含めてメールで送ってもらい、一喜一憂。でも、若水中を指導されていた杉浦先生の「選手の活躍を期待するのではなく、信頼するぐらいまで鍛えなければダメだ。」という言葉通り、彼らの勝利を信頼しました。函館八雲、釧路幣舞、共に相手に優勢な時間ができたようですが、そこで決してあわてることなくゲームコントロールしていたことを報告で聞きました。ベンチに入られなかった寂しさを感じつつも、自分がいなくても清田のバスケットボールを展開できる選手達を誇りに思いました。

そして、いよいよ最終日。全国出場の切符をかけた準決勝の対戦相手は帯広南町でした。決戦大会以来の再戦です。前回の対戦ではこちらのプレスに面食らったようでしたが、同じことが2度続くほど全道のレベルは低くありません。安達先生の指導の下、しっかりとしたプレスダウンとゾーンアタックを用意してきたことがわかる相手選手達の動きでした。一方の清田はシュートまではいくものの入らない、ある意味いつもの試合展開…。試合は高さやパワーで利のある南町優勢で進みました。最大13点まで点差が開き、残り1分でもまだ4点負けていましたが、終盤になってようやくシュートが決まり始めたので、最後まで彼らがやってくれることを信じてベンチワークに徹しました。土壇場でスティールから高橋の速攻が決まって同点に追いつき、延長戦へ突入。延長戦でもポンポンと4点先制されましたが、ここからまた粘りに粘って逆転に成功。男子にとっては念願の全中出場を決めることができました。

応援に北斗市まで来られていた本校の藤澤校長先生が、退職にあたっての忘れられない思い出として「男子バスケットボール部の全道準決勝を見たこと。」と本校で作成した「惜別の葉」に書かれていました。ただ、強ければよいのではなく「人を感動させられる試合

を」。これが本校バスケットボール部のモットーです。勝つことも大切ですが、それ以上に得るものがあった試合をすることができた実感しています。そして、今まで応援ばかりしてきた男子が応援される側の人となったことには感慨無量でした。

ただ、せっかくの全道決勝戦はイマイチの内容で終わりました。ここまでの3試合の疲労感、特に延長までもつれこんだ準決勝のダメージは大きかったと言えます。「決勝戦はテレビマッチだから、全道中に清田の小さくても頑張れるバスケットボールを発信しよう！」と選手には言いました。うなずいてはいるものの、走りきる脚力はもうありませんでした。仕方ないととらえることもできますが、それを平気でやるぐらいでない日本一にはなれません。試合終了後、改めてそのことを選手と確認し、全中に向けての取り組みを開始しました。

5. 静岡全中

全中に向けての取り組みは原点回帰で、一にも二にも高さ対策です。次いで、スピードあるオフェンスコンビネーションの創造とプレスディフェンスのさらなる強化でした。女子の指導、金策の工面など、1日24時間フルタイムで動いても足りないほどの取り組みをして全中の舞台である静岡へと向かいました。

浜松空港に着いてまず最初に向かったのは藤枝明誠高校です。一昨年まで札幌創成高校にいた三上先生を頼って練習会場として使用させてもらいました。しかも、インターハイ準優勝の成績を収めて帰ってきたばかりの高校生と練習試合もして頂き、選手も大喜びの一時でした。

翌日の開会式は男女そろっての出場。全国でたった1校の快挙ですが、それはそれであって特に配慮などはありません。結局、予選リーグの組み合わせは男女の試合時間がほとんど重なっており、しかも女子会場の浜松アリーナと男子会場のエコパアリーナはどんな移動手段を使っても最低1時間はかかる…と言われました。

選手もコーチも極限まで頑張ってきた練習。試合の時は男女が続くと、昼食を取る時間もなく、時には目の前が真っ暗になる立ちくらみをして頑張ってきた結果の晴れ舞台である全中。そこでベンチに入れないのは断腸の思いでした。大会2日目は浜松アリーナ1会場になりますので、何とか予選リーグを突破しようと選手達と再確認。またも祈るような思いで選手を送り出しました。

女子会場に逐一入るメールから苦戦の様子が伝わってきます。九州3位のあげな(沖縄県)の180cm後半が2枚いる高さでレフリーの判定の軽さに悩まされているようです。飛んでいけるものなら飛んで行きたい気持ちを我慢して携帯電話を握りしめていました。結果、敗戦の報告が届き、選手達の顔、応援に来られている保護者の方々の顔が走馬燈のように思い浮かびました。

次の試合も女子とほとんど重なっていますが、何が何でも絶対に行こう。そう決めて、女子の試合が終わるや否や、男子会場へ向かって移動しました。浜松アリーナにいたタク

シーの運転手さんに聞くと、やはりJRを利用するのが一番早いとのこと。「エコパアリーナのある袋井市の駅前にはタクシーが停まっていますか？ 常駐していないようなら、運転手さんの会社で呼んでおいてほしいのですが…」と聞いてみると、「大丈夫、大丈夫。タクシーは停まっていますよ。」と軽く答えられました。ちょっと安心してJRに乗り込み、列車の中を進行方向に向かって走りたい気持ちを抑え、袋井市に到着しました。ところが、駅前にはタクシーの姿は全くありません。少し歩いたメインストリートらしきところにも、ほとんどタクシーはいません。もうこうなれば走る他ない。そう判断して、袋井市の駅からエコパアリーナまで猛ダッシュしました。8月の炎天下、しかもずっと続く坂道をひたすら走っていたところ、右脚に激痛。経験上、肉離れだとわかりましたが、走り続けました。とにかく選手達の顔を見て、最後の一声をかけてやりたかったのです。

会場まで全国の知り合いとすれ違い、汗だくになっている私を見て「何やってんの？」と笑われましたが、走りながら状況を話すと皆さん共感してくれました。やっとの思いで会場に到着しましたが、こういう時に限って体育館に入場するためのIDカードがすぐに出てきません。北海道なら顔パスでも全国ではそういきませんから、カバンをひっくり返してようやく取り出し、アリーナの1階へと駆け降りました。

東北1位の山王と試合をしているコートにようやくたどり着き、電光掲示板を見ると、すでに第3ピリオド終了間際。点差はかなり開いています。しかし、私のやることは1つ。とにかく声を出して選手達を鼓舞しました。試合終了のブザーが鳴り、敗戦が決定。彼らと悪戦苦闘しながらも全国の頂点を目指した取り組みが終わりました。最後の最後でベンチに入れなかったことが残念でたまらなく、泣いている子ども達を見ると、ウルツとくるものがありました。自分が泣く資格はないと思い直し、最後の集合写真に収まりました。

終わりに

男女の部活動を1人でもつことは大変なことです。そして、頑張った結果が前述したような悲しい現実につながることもあります。それでも、困っている子ども達がいるのなら、勇気をもって教師は男女同一顧問になるべきです。大変なことやツライことがある分、子ども達と味わう喜びは2倍にも3倍にもなります。バスケットボールの大好きな子ども達を路頭に迷わすべきではありません。私はそう信じて指導にあたってきました。

ただ、全中という晴れ舞台で悲しい思いをさせた選手と保護者の方々には申し訳ない思いでいっぱいです。紙面を借りてあいさつさせていただきます。すいませんでした。そして、たくさんの感動をありがとうございました。

最後になりますが、清田中学校バスケットボール部の諸活動に対し、ご理解とご協力をして頂いた全ての方々に感謝し、今夏の全中の報告とさせていただきます。また暑い夏に躍動する子ども達を育てるべく、日々努力していきます。